

## 鳥取県内における看護学史・医学史を探る～その2～

村口 孝子<sup>1</sup> (Takako MURAGUCHI)・早川 大輔<sup>1</sup> (Daisuke HAYAKAWA)・  
土居 裕美子<sup>1</sup> (Yumiko DOI)・平野 裕美<sup>1</sup> (Hiromi HIRANO)・  
河崎 和穂<sup>2</sup> (Kazuho KAWASAKI)・矢倉 紀子<sup>3</sup> (Noriko YAKURA)  
鳥取看護大学看護学部看護学科<sup>1</sup>、鳥取看護大学・鳥取短期大学付属図書館<sup>2</sup>、  
元鳥取看護大学看護学部看護学科<sup>3</sup>

### 【背景と目的】

鳥取県内には当該分野に関する研究者が少ないこともあり、本県の看護学史・医学史・医療史については他県に比して未知のことが極めて多い。

今回、香取開拓団で活躍された保健師・新名静子氏についての手記、及び同僚保健師、香取住民に対して行った聞き取り調査の内容を紹介する。また、他の各種資料からわかったことについて一部報告する。

### 【活動（研究）の概要・結果】

#### 1. 開拓の歴史

「香取」の地名は、終戦後に香川県の人たちによって開拓されたことに由来し「香」川と鳥「取」から「香取」と名付けられた。開拓地は現在の大山町大山・名和・中山にわたり、標高350～1,000mに及ぶ傾斜地である。標高500mの中心部には、開拓本部、農協事務所および販売部、診療所、小学校分校があり、ここから放射状に走る道路に沿って各部落があった。同じ開拓地内でも標高差が大きく、地形は南北に細長く、南に高く北に低い。冬季には雪と風があり自然条件のかなり厳しい高冷地である。

香取は1946年（昭和21）8月、中国大陸より引揚げた第8次樺林開拓団（香川県栗熊村分村：現丸亀市）を中心に拓かれた約100戸からなる開拓村である。陸軍軍馬補充部跡地の長野兵舎（現在：中山町長野）の共同生活に始まり、昭和22年4月、南方14kmの人里離れた山奥無住地帯に入植したものである<sup>1),2),3),4)</sup>。

1953年（昭和28）頃から10年程は全員が出稼ぎに出て<sup>3)</sup>、その間、半数が離農した。昭和44年に農家戸数45戸、人口180人が定着した。1981年（昭和56）には35戸が農業に従事している。平成22年、人口は約160人（2012年現在）であった。

当時は、林業のトラックは通うが、定期のバス便に乗るためには、上端は7～10km先の佐摩部落まで坂道を歩かなくてはならないという交通事情であり、中学校・郵便局・商店・診療所も同様であった。そのため、中学生は1～3月は寄宿舎で生活していた。

昭和22年1月、長野兵舎にて小学校が臨時開校され、1947年（昭和22年）に入植とともに正式に開校となった。現在の校舎は、その後2年間の歳月を経て、香取の人びと自らが兵舎を移転移築したものであるが、平成20年3月に閉校となった<sup>5)</sup>。

K氏（80代後半女性）による当時の話：自分は満州から引き揚げ、香川の叔父のところに行った。父親が開拓に参加しており、親はテント生活だった。大山町下市（旧中山町）に小学校3年生の時に来たが、香取に小学校ができたのでこちらに来て一緒に住むようになった。当時は自給自足で食べる

ものを作った。炭焼き、薪をつくり現金収入にしていた。米がとれないので、うどん・雑炊・サツマイモ、ワラビなど季節にとれるものを食べていた。

## 2. 開拓保健婦の歴史

終戦後の深刻な食糧難対策として、1945（昭和20）年、政府が発表した「緊急開拓事業実施要領」により、農地開拓が行われた。これは、食糧増産だけでなく、海外引揚者、戦災離職者、復員軍人の就労確保という目的もあり、開拓地の入植者の健康を守るために1947（昭和22）年から農林省所轄による「開拓保健婦制度」が導入された。開拓保健婦は、開拓者個人の抱える健康問題解決のために、生活に入り込み、生活に密着した個別支援活動という形で、求められる活動を展開した<sup>6)</sup>。1970（昭和45）年、農業における開拓問題は終わったとして、「開拓保健婦」は保健所に所属することになった。所管も農林省から厚生省に移管され、1978（昭和53）年、「国保保健婦」も都道府県の保健婦となった。



第二次住宅 香北地区（昭和24年頃）



第二次住宅 香北地区（昭和24年頃）

## 3. 保健婦 新名静子氏について

新名静子氏は、1915（大正4）年生まれ。香川県庁勤務、国保保健婦、保健所保健婦を経た後、坂出市にいたときに「香取開拓団に保健師が欲しい」との依頼を受けた。躊躇しているところに、「鳥取県でいくら保健婦をさがしても、いない」との便りを受け、1951（昭和26）年4月、現地踏査に出かけた。同年5月末、鳥取県から辞令が交付され、36歳の時に香取診療所に着任した。診療所まで7kmの道のりを徒歩で移動したという。

香取診療所は常勤医が不在で、何かあれば住民は大山診療所まで行かなくてはならなかった。

新名氏は、「診療所とつながった職員宿舎に到着すると、バラック建てで雨露をしのぐ程度の一室であり、四囲の板壁から入ってくる隙間風。文化生活から一躍原始生活に転落した。雨の日も風の日も歩き続けた。腹が痛い。熱が出た。外傷をした。4km上の方で腹痛の応急処置をして帰れば3km離れた下の方からお産が始まっているから急いできてください。夜はもうくたくた。運動靴を履いたままベッドに倒れこんだこともしばしばであった。」と自ら手記に記している<sup>7)</sup>。

保健婦F氏は、「新名さんはきれいな言葉でおしゃべりされるし、いろんな事があってもカバーしたり協力してくれたりする人であった」と、新名氏に対する思い出を述べている。



新名静子氏  
（「開拓35周年香取」より）

K氏（前出）は今回行った聞き取り調査で、「一番上の子のお産の時は、隣のおばさんに手伝ってもらいましたが、第2子からは、新名保健婦さんにお世話になりました。新名さんは、温厚で親切な方でした。どのような活動をされていたかと聞かれても、自分たちは食べるのが精一杯で、人のことを気にかける余裕はありませんでした。これが正直なところです。」と語った。

また、I氏（70代）からは、「傷の手当をしてもらったりしていました。注射はしてもらった記憶にはありません。注射は下の保健婦（大山診療所）さんにしてもらっていました。」との話をきくことができた。

新名氏の手記には、「当時は、早期に発見できても、医者を迎えるお金がない。急いで連絡をしようと思っても電話がない。小学生を部落の連絡係に使い、中学生は下の7km先の診療所の連絡係に使い、おつかい賃を自腹で払っていた。昭和31年、開拓組合の事務所に1台の公衆電話が設置され、連絡も歩いて下まで行っていたがなくなりよくなった。小学生の連絡係から、各部落の拡声器からすべての部落に連絡がとれるようになった。」との記載が見られる。

昭和28年3月に、正しく住民の健康を守る診療所が欲しいとの願いにより、大山診療所香取分所が当所に設立され、週1回医師が来診し、救急患者の治療もでき、1週間の継続処置の指示も受けることができるようになったが、10年足らずで医師不足で廃止されるに至った。

この理由について、I氏は「道路が整備され、1日3往復の定期バスが運行され、地域の住民が診療所に通えるようになった事も原因ではないかと思う。」と自らの考えを語ってくれた。

新名氏は手記の中で「昭和26年から昭和30年の間は、予防衛生業務よりは、むしろ応急処置の治療業務の明け暮れに終わってしまった。医療法違反の医療行為もしばしばであり、その反省と現状の板挟みに挟まれ葛藤があった。」と述べている<sup>8)</sup>。

香取地区では、近所・村の人たちを互いに知らないことから、開拓主婦の親睦を兼ねて、昭和27年香取婦人会が結成された。その加入者は開拓組合の主婦全員で、主に家庭の健康管理、健康相談、子弟の養教育など開拓住民の健康管理への原動力となり、その組織を活用して衛生思想の普及、健康相談、家族計画などの業務がすすめられていった。確井<sup>9)</sup>は、「保健婦が中心となって組織を作り、この地区は保健婦の指導が強く入っていることが大きな特色だ。」と述べている。

昭和37年、新名氏が47歳の時、開拓保健婦にスクーターが配車され、効率よく広範囲を回ることもできるようになった。

今回行った聞き取り調査では、新名氏的心情を知ることができなかった。しかし、新名氏は手記中で「家庭訪問から長い坂道を歩いて帰っても、燈火のない、火の気のない家に入ることがためらわれた。なんのためにここに踏みとどまらなければならないのだろう。それは住民の信頼に一生懸命応えるためであった。また、三好団長から『自分はここに新しい村づくりをしたい。それにはあらゆる指導者が必要である。その指導者をそろえたいその分野において協力をしてください。』と言われ、新しい村づくりの指導員の一人としての使命感であった。』<sup>9)</sup>と、自らの心境を述べている。さらに手記は「昭和43年診療所・保健婦宿舎が完成。20年前ここに赴任するために現地踏査に来た時に、白垂の診療所を作りましょうと、新しい村づくりの計画の中にあっただが、長い道程であり嬉し涙をかみしめた。」と続く。

1970（昭和45）年、農業における開拓問題は終わったとして、新名氏は米子保健所勤務となる。

晩年は香川県に帰って暮らしていたが、当地で逝去された。正確な没年月日は不明であり、現在調査を進めている。

今回の聞き取り調査では、新名氏の他に、大山診療所に勤務していたI保健婦についての話題がたびたび発せられた。I保健婦の同僚であるF氏は、「大先輩のIさんは国民保険の大山診療所に住まれておられ、看護婦さんの仕事と保健婦さんの仕事をされていた。お医者さんが処方されると、それを持って家庭訪問して注射したりさ



診療所・保健婦宿舎跡

れていた。夜中でも住民が来られると率先して対応されていた。I 保健婦さんに傷の手当をしてもらった時に痛がると、『男だったら辛抱しなさい』と言われたこともあった。予防接種の時などは、自分たち子供の足で2時間近く歩いて診療所まで行きました。」と語られた。前出のK氏からも「Iさんは、まるで新名保健婦さんと姉妹のようだった。」とか「病気になると診療所から訪問してもらい診てもらいました。とても活動的な方でした。」との話を聴くことができた。書籍『とっとりの女性史 戦後からのあゆみ』には「I 保健婦は、昭和26年に開拓地に新名静子保健婦が赴任し、協力しあって仕事を進めることができた。当時の村長はとても理解があって思いきり仕事ができ充実感一杯でとびまわっていました。」との記載を見ることができる<sup>10)</sup>。

以上のことより、新名氏が香取開拓団に就任する以前は、I氏が大山診療所に足場を置いて地域住民に寄り添った活動を行っており、香取開拓団の人々にとって重要な保健婦であったことが伺える。

## 【おわりに】

香取診療所で保健婦として活躍した新名氏について調査をおこなった。当時、厳しい自然環境と未発達な交通手段の中での苦労が伺えた。特に赴任当初は、新名氏自身が「山陰人特有の言葉のあやや、因襲に苦しんだ。」<sup>11)</sup>と手記中で述べているように、知らない土地で自分を知ってもらうために、多大な努力をされてきたと推察される。某保健師より「新名さんは、米子で会議、研修会があって夜遅くなくても必ず香取に帰っておられた」という話を聞いたことがあるが、それは開拓保健婦として、地域住民を守るための使命感からの行動であったものと考えられる。

今回の調査をまとめるにあたり、協力していただいた皆様に感謝いたします。

## 《引用・参考》

- 1) 確井隆次「開拓農家の生活実態：鳥取県香取開拓団調査報告（1）」社会問題研究、大阪社会事業短期大学社会問題研究会第9巻第4号（1959）、p.1-52
- 2) 飯田耕二郎「伯耆大山山麓の開拓村」KIDA 著 1972-21
- 3) 高津隆「開拓者たち 北満・樺林栗熊分村から大山香取村へ 入植一世・大林光雄さん証言録」（2019）
- 4) 内田和義、横川亮一「開拓団長三好武男のリーダーシップ」鳥根大学生物資源科学部研究報告第1巻第5号（2000）
- 5) Web：大山ものづくり学校：<http://cms.sanin.jp/p/sacca/3/>
- 6) 松本千春・荒木紀代子「保健師活動の歴史的変遷から公衆衛生看護を考える」アドミニストレーション 第25巻第2号（2019）
- 7) 新名静子：開拓保健婦20年—開拓住民の悲喜こもごもとともに pp73-80 保健婦雑誌第26巻第6号（1970）
- 8) 前掲7)
- 9) 前掲7)
- 10) とっとりの女性史 戦後からのあゆみ 鳥取県 とっとりの女性史編集委員会、鳥取県企画部男女共同参画推進課編著 刊行年（2006）
- 11) 前掲7)